

うたとかたりの対人援助学

第36回「水上勉が聞いた子守唄の正体を探る」

鵜野 祐介

謎の子守唄の正体を探る—TV 出演

先日(2026年5月28日)、読売テレビの「かんさい情報ネット ten. 《お役に立ちます 亡き祖母が歌う”謎の子守歌”！正体は大調査!》」という番組に出演した。昨年100歳で亡くなられた兵庫県西脇市の依頼者の祖母・鈴代さんがよく歌ってくれた子守唄が元々どこで伝承されてきたのかを探るという企画だった。日本の子守唄・わらべうた研究の第一人者である尾原昭夫先生と私がアドバイスを、依頼者としてポーターが自分たちで調査してその子守唄の正体を探し出すという構成で、放送後1週間の無料配信もあったため、視聴して下さった方々から好評をいただいた。「子守唄は深いですねえ」という知人の感想は、私自身の同感でもあった。

鈴代さんが歌っていた子守唄の歌詞は以下の通り。

ねんね ねんね ねんねえよ
ねんね ねんね ねんねえよ
はよねんね しんしゃい
ねんね しんしゃいよ
やまねこが くわい くわい
ちゅうて きいよるばい

北原白秋編『日本伝承童謡集成』(第1巻、三省堂1947/1974)に掲載されている伝承子守唄の歌詞は3,400編を越えるが、今回の依頼者が歌った子守唄にぴったりと符合するものは見当たらなかった。

また、楽譜も付いている全国規模での体系的な資料集である浅野建二他監修『日本わらべ歌全集』(全28巻、柳原書店)にはアイヌ民族のものも含めて915編の子守唄が収載されているが、そのものズバ

りというものはなく、やはり正体を突きとめることはできなかった。

そして部分的な一致をみた歌詞やメロディの伝承地は福岡・佐賀・大分などの九州北部と和歌山だった。それらが混じり合い、ちゃんぽんになって鈴代さんの子守唄が生まれたようだ。

兵庫県西脇市から外に出て生活したことはなかったという鈴代さんが、なぜそんな「ちゃんぽん子守唄」を伝承していたのか？ その理由として考えられるのは、西脇市で女工(女性工員)や女中(住み込み家政婦)や女給(飲食店・風俗店従業者)として働いていた九州北部や和歌山出身の女性たちの存在で、鈴代さんは、彼女たちと交流し様々な唄やお話を聴く中で、この子守唄を誕生させたのではないかとこれが尾原先生や私の出した結論だった。

水上勉が祖母から聞いた子守唄？

実は、この取材を受けていたのとほぼ同じ時期、もう一つの「子守唄の正体」について調べていた。作家・水上勉(1919-2004)の祖母が勉に歌っていた可能性の高い、次の子守唄である。

げんげの花よ オ なぜ泣くぞオーエ

親アないか、子オないか
親はあれども かりがねよ

かかは河原へななつみに
ととは丹後へ金掘りに
三年たってももどりやせぬ

げんげの花よ なぜ泣くぞ

丹後は遠い山のくに
三年経ってももどらねば
雁にたのんでふみ送ろ

かりかり先になれ竿になれ
ととよもどれというとくれ

(水上勉『地の乳房』福武書店 1981:下巻 116-119)

水上の父母をモデルにした長編小説『地の乳房』(1981)に、盲目の祖母「いし」が孫の「誠」を、背にくくりつけて子守りしながら繰り返して歌った唄として紹介される。

一方、水上のエッセイ『ものの聲 ひとの聲』(1980、文庫版 1985)にはこう綴られる。「幼いときの記憶はと尋ねられると、あいまいなものだが、とにかくそこに生まれていた。そして、サザエのふたみたいな眼をした祖母がいた。祖母はいつも私に寄り添うようにしていた。父と母は働きに出ている。祖母と私は留守番だ。私は眼が見えるからそこに眼の見えぬ人がいるという、そういう陽だまりみたいなものがあったことを漠然と思い出させる」(1985:11-12)。

祖母は彼が4歳の時に亡くなったが、「陽だまりみたいな」存在だったという祖母がモデルとなった「いし」の歌う子守唄(以下、水上版「げんげの花よ」)は、水上の生地・福井県大飯郡おおい町の伝承子守唄の可能性が高いと推測される。

水上勉と立命館大学と私

ところで、私は平日週5日、立命館大学衣笠キャンパスに通っている。キャンパスの住所は京都市北区等持院北町56-1で、そこから分かるように、キャンパスの南側に等持院があり、また北側には同寺の墓地がある。

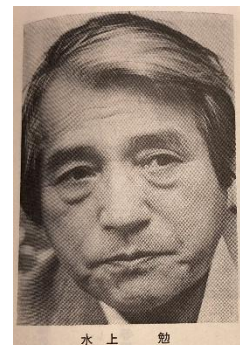
「万年山と号する臨済宗天龍寺派の寺院である。もと仁和寺の一院であったが、南北朝時代の暦応4年(1341)に足利尊氏が夢想国師を開山として中興し、足利氏の菩提寺である中京区三条高倉の等持寺の別院とした。延文3年(1358)に尊氏がこの寺に葬られると、その法名をとって等持院と改められ、その後、本寺である等持寺を統合した」(山門前の立札より)。



貧しい一家の6人兄弟の次男である勉は、9歳の時、故郷若狭を離れて京都の臨済宗相国寺塔頭の瑞春寺に入門した。父親が寺大工として菩提寺である臨済宗相国寺派の西安寺と深く関わっていたことからである。そして13歳の時、寺を脱走し、京都の叔父に説得されて再入門したのが同じ臨済宗の等持院だった。やはり何度も脱走を試みつつも18歳までこの寺に過ごし、旧制花園中学校に通った。

卒業後の1937年4月、立命館大学文学部国文学科に入学した。昼間は膏藥の行商をしながら夜間部に通っていたが、やがて同級生たちに誘われて遊興に耽るようになり、「金欠となり学費滞納となった。だらしのない生活に終止符を打ちたかったのとひと旗あげたい欲望があって」(1985:144)、大学を退学して満州へ渡った。奉天駅の近くの倉庫で労務見習いとして働いていたが、過労のためか結核に罹り、翌38年に故郷へ帰った。

ちなみに、当時の立命館大学の校舎は河原町広小路にあり、水上が現在の衣笠キャンパスに通ったわけではない。当時の総長、中川小十郎が等持院の檀家であったことが、後に広小路キャンパスから等持院北隣へと移転することに繋がったようだ。



水上 勉

1980年4月、京都に来て、大学時代の一時期、「はしか」のように水上作品に耽溺した私にとって、2013年4月に立命館大学文学部に赴任した時、水上と「再会」することになればと密かに期待していた。そして今年（2026年）7月に発行される日本子守唄協会の季刊誌「ららばい通信」次号に「日本子守唄紀行 第17回」として北陸地方の子守唄を紹介しようと決めた時、当地の精神的土壌から生まれ育まれた子守唄が、水上の私小説的作品やエッセイの中で紹介されているのではないかと思いついた。

そこで早速、若州一滴文庫に電話で問い合わせしてみた。同館は水上が出身地おおい町に私財を投じて1985年に開館させた総合文学館である。すると、対応された学芸員の下森弘之さんが教えて下さったのが、水上版「げんげの花よ」だった。

「げんげの花よ」の歴史的背景

『地の乳房』の中で、この唄の歴史的背景について姑の「いし」が嫁の「愛」に次のように語っている。

いし「むかしのひとはみな丹後へ金掘りにゆかんした。

丹後はいくの(=生野:筆者注)のやまやった。いくののやまは、銅山で、朝から晩まで、水かえやった」

(中略)

いし「ああ、うらの若いころは、日清日露の戦争があったさけ、銅山がいそがしゅうて、村じゅうの娘らが、あとやまに出たもんやわいの」

愛「あとやまで……」

いし「もっこをかついで、石をはこぶしごとやった」

愛「お婆んは、その時は眼エはどうもなかったの」

いし「ああ、よう見えた」

(中略)

いし「かな山でよろけ(=カンテラのすすを吸ったために発症した肺の病気の種類:筆者注)になると、村へもどってもこけにならんしたさけ……子守りうたに、三年経ってももどりやせぬとうたんやわいの」

愛「そうすると、いくのの山で、よろけて死なんしたんかいの」

いし「そうや、死なんしたさけ、子にそないうとうて、山のきょうとい(=恐ろしい:筆者注)ことを教えたんや

わいの」 (1981:下117-119)

つまりこの子守唄は、生野鉱山に出稼ぎに行った父親が3年経っても戻って来ず、肺の病を患い当地で息を引き取ったのではないかと案じている子どもの心情を「げんげの花」に置き換えて歌っているのである。

生野鉱山は現在の兵庫県朝来市生野町にあり、1973年まで採掘されていた鉱山である。平安時代初期の大同2年(807)の開坑と伝えられ、江戸幕府を開いた徳川家康は生野3万7千石を直轄地とし、越後国の佐渡金山、石見国の石見銀山と共に幕府の重要な財源とした。(生野鉱山公式HPより)

現在の兵庫県中・北部と京都府北部にまたがる丹波(丹後)地方のみならず、福井県若狭地方からも数多くの若い男女が生野鉱山に出稼ぎに行き、過酷な労働で病に倒れ、命を落とした。そんな底辺の暮らしにあえぐ人びとの哀訴がこの唄に残響していた。

果たして、この唄は伝承の子守唄だったのだろうか。水上の創意はどの程度加わったのだろうか？

若州一滴文庫を訪ねる

5月16日(土)、福井県大飯郡おおい町岡田の若州一滴文庫を訪ねた。朝8時30分、大阪府箕面市の自宅を自家用車で出発し、名神高速道・京都縦貫道・舞鶴若狭自動車道を経由して約2時間半かけてたどり着いた。

新緑が眩しい広い庭園を中心に、本館、竹人形館、くるま椅子劇場、茅葺館、六角堂(休憩所・食堂)の諸棟が配置されており、2万冊を超える蔵書や、水上文学にゆかりの画家たちの絵画作品や竹人形たちが迎えてくれた。



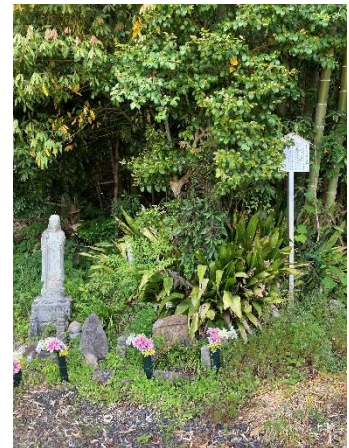
入館時に配布されたリーフレットに、水上が綴った同館設立の趣旨が記されている。

「たった一人の少年に」
ぼくはこの村で生まれたけれど、
十才で京都に出たので
村の小学校も卒業していない。
家には電灯もなかったの、本もよめなかった。
ところが諸所を転々として、
好きな文学の道に入って、本をよむことが出来、
人生や夢を拾った。
どうやら作家になれたのも、本のおかげだった。
ところが、このたび、所蔵本が多くなって、
どこかに書庫をと考えたが、
生まれた村に小さな図書館を建てて、
ぼくと同様に
本をよみたくても買えない少年に
開放することにきめた。
大半はぼくが買った本ばかりだ。
ひとり占めしてくさらせるのも勿体ない。
本は多くの人によまれた方がいい。
どうか、君も、この中の一冊から、何かを拾って、
君の人生を切りひらいてくれたまえ。
たった一人の君に開放する。

昭和六十年三月八日 水上勉

水上がこの文庫を開館したのは66歳だった。今年6月に満65歳になる私にも、貧しい家庭ではなかったにせよ、14歳で故郷の山あいの町を離れた身として、彼の心境がよく分かる。

一滴文庫を後にして、歩いて約5分のところにある岡田（おかた）地区を散策した。水上の代表作の一つ『はなれ瞽女おりん』のモデルとなった瞽女が娘とともに住んだとされる阿弥陀堂跡「おりん堂」、水上家の菩提寺である西安寺と埋葬地、祖母の手を引いて勉が登った石段、氏子だった若宮神社などを巡った。



私は、(頼みもしないのに)人から指さされるほどの貧困な家庭に生まれた。父は大工だったけれども、祖母が全盲だったので、そういう人のお腹から生まれた父は、全盲の母を守しなければならないために遠い所へ稼ぎに行けない。(中略)考えてみると、一番最低の家である。夢も将来性もない。部落からちょっと離れた一軒家で、しかも埋葬地に近い。木小舎のような借地の家で父母は新婚生活をはじめ、三年目に私が生まれた(1985:10-11)。



緑濃い谷間の集落はひっそりとしていたが、3～4歳の男の子に手を引かれて、寺へと続く長い石段をよろよろと登りながら、「げんげの花よ」を繰り返し口ずさむ盲目の老女の姿が浮かんだ。

文献に登場する「げんげの花よ」

一滴文庫への訪問に前後して、水上版「げんげの花よ」を収めている可能性がある文献資料を検索していった。現時点で明らかになったことをまとめておく。

水上が紹介したものに一番近いのが、福井県教育委員会編『福井県の民謡—民謡緊急調査報告書—』（1988）に掲載された「げんげの花」である。

げんげの花よ なぜ泣くの なぜ泣くの
ととさんかかさん あるけれど
かかさん川原へ ななつみに
ととさん丹波へ 金掘りに
一年たっても 帰りやせぬ
二ねんたっても もどりやせぬ
三年目には ちとみえて
四年目には もどらんした。

（ママ）
演唱者は大飯郡大飯町本郷の三宅正重（1920年生まれ）である。

一方、大飯町誌編さん委員会編『大飯町誌』（1989）には、大島地区で歌われていた手まり歌が紹介されている（演唱者と生年は不詳）。

げんげの花よ なぜなくどー
おやもな—いか 子もないか
親も子—もあるけれど
かあさん川原へ ななつみに
と—さん丹波へ 金ほりに
一年たっても まだもどらん
二一年たっても まだもどらん
三年目—の ここのか（九日）に
おとにもこ—えて 十がきた へ（1989：462）

こちららも類歌と判断していいだろう。それでは、この唄はおおい町や同町を含む若狭地方で誕生した

ものと断定できるのだろうか？

石川県教育委員会文化課編『石川県の民謡 県内民謡緊急調査報告書』（1981）には、押水町・志雄町・羽咋市土橋町・志賀町徳田・柳田村で、子守唄や手まり唄として近似する5編が収録されている。その一つは以下の通り。

坊やの父ちゃんどこ行った
金が湧くとて金山へ
一年経っても状が来ぬ
二年経っても状が来ぬ
三年三月のお十九日の
朝の六つに状が来て
（後略） （羽咋市土橋町）（1981：156）

5編に共通して、子どもの父親／母親／お守（子守娘）が金山へ行って、一年経っても二年経っても状（便り）がなかったが三年目に状が届く、というモチーフを含む。

また、前述の白秋編『日本伝承童謡集成』（1947/1974）には、石川の子守唄として2種類の歌詞が掲載されている（福井の類歌にはない）。

お花島に子が泣くが、
寒てひだるて子が泣くか、
寒もひだるもないけれど、
父さまとお母と、金打ち鍛冶屋へ金打ちに、
一年たってもござらんが、
二年たってもまだ来んが、
三年三月の夜の夜中に戸を叩く、
（後略）（1947/1974：174）

白秋が同集成を編纂するために、児童雑誌『赤い鳥』（1918年創刊）の中で全国の読者に伝承童謡の情報提供を呼び掛けたのは、水上の祖母が「げんげの花よ」を孫に歌っていたのと同時期にあたる。

そこから、大正時代に福井県や石川県で同系統の詞章が子守唄や手まり唄として歌われていたことが推測される。但し石川では、金掘りに行った場所が丹波とは特定されていない。

一方、京都にも類似する詞章を持つ手まり唄がいくつかに記録されている。

げんげん花や たちばなや
京の娘が 木綿三尺買うて
あるのに ないとおっしゃった……

(旧京都市域、高橋美智子『京都のわらべ歌』柳原書店
1979:64)

げんげん花の咲き盛り
親が悪いか、子がないか
親も子もあるなれど……
(丹後町、同上64)

……わたしの弟の千松が、
七つ八つから^{かね}金掘りに、
金を掘るやら掘らぬやら、
一年待ってもまだ見えぬ、
二年待ってもまだ見えぬ、
三年三月で^{みつき}状が来て……
(丹後地方各地、同上60)

これらのうち最後のものを、著者の高橋は「千松手まり歌」の伝承の類歌として紹介している。

17世紀中期に仙台伊達家で起こった、いわゆる「伊達騒動」を元にした人形浄瑠璃『伽羅先代萩』(1785)の義太夫節に、「わしが息子の千松が、七つ八つから金山へ、一年待てもまだ見えぬ、二年待てもまだ見えぬ」の一節がある。そしてこれが全国各地に広がって、手まり唄や子守唄としても歌われるようになったのだろう。

水上版「げんげの花よ」も「伽羅先代萩」に由来する「千松手まり歌」の系譜に連なると思われる。

おわりに—どんなメロディで歌われたのか？

水上版「げんげの花よ」は、福井県おおい町で伝承されてきた子守唄や手まり唄として、大正から昭和初期にかけて歌われたものの類歌であり、丹波・生野の鉢山へ出稼ぎに行った地元の人びとの苦難の歴史が刻まれている。一方、類似する唄は福井県に隣接する石川県や京都府にも見られ、そのルーツは

18世紀に流行した歌舞伎や浄瑠璃の演目『伽羅先代萩』に求められる。以上のことが明らかになった。

ところで、これまでに検索した文献資料の類歌のうち、楽譜付きのものはない。一方、音源資料としてCD『日本の子守唄 ふるさとエレジー』(歌:渡辺静香、合唱:あかね会、演奏:アンサンブル・シンフォニック、監修:菅野寛、企画・制作:CTA、2013)収録の「げんげばな」がある。全12曲のうち、11曲は「江戸子守唄」など地名を冠したタイトルだが、「げんげばな」にはそれがない。ライナーノーツにもこの唄の伝承地や出典は記載されていない。歌手や監修者や制作会社にアクセスを試みているがまだ実現できていない。学術性には乏しいと言わざるを得ないが、参考までに採譜して載せておく。

げんげばな げんげばな なぜ泣くの
親が悪いか 子がないか
げんげばな げんげばな なぜ泣くの



ゆったりとした4拍子で(低)ラ-シド-ミ-ファ-ラというヨナ抜き短音階だが、音域がかなり広く、編曲者により改変された可能性もある。

現在、一滴文庫や全国わらべうたの会をはじめ、いくつかの団体や知人に問い合わせしているところで、いつの日か水上版「げんげの花よ」をメロディ付きで復元できればと期待している。

最後に、取材にご協力下さった一滴文庫の学芸員・下森弘之さんに紙面を借りて謝意を表したい。

